研究ノート

上海浦東新区における対外開放とプロテスタント教会堂の変化

―― 上海市感恩堂のケースから ――

村　上　志　保

1　はじめに

本稿では，上海市における経済発展を目的とした対外開放が背景となっているプロテスタント教会の変化について議論する。様々な変化のうち本稿において特に取り上げるのは，中国政府による宗教政策が認めてきた範囲を越えた，新たな形態を持つ「感恩堂（英語名：Thanksgiving Church）」という教会堂開設のケースである。この教会堂誕生の背景，そしてその特徴的な形態および活動内容は，まさに上海市が中国経済の中心であり，かつグローバル資本主義経済への参入の最先端となっているという地域的状況によって生じている。本稿ではこの事例を通して，経済発展に伴う上海の国際化を背景とした，教会堂をめぐる政策実行の変化について概説する。

本稿が取り上げる感恩堂は，90年代以降国家規模での開発プロジェクトが展開されてきた上海市浦東新区に2005年に開設された教会堂である。感恩堂は愛国宗教組織である中国基督教三自愛国運動委員会に属する政府公認のプロテスタント教会堂であるが，この教会堂のあり方は，従来の共産党政府による宗教政策の下で認められてきた他の教会堂と比べると極めて異質である。異質である点というのは，中国の宗教政

策は中国人信者と外国人信者の交流を制限しているが，感恩堂は海外と関わりの深い企業と密接な関係があり，その企業の創業者からの資金提供によって開設された公認教会であるという点である。さらにこの教会では中国人と外国人が共に教会員となっているという点も，少なくとも上海ではそれまで見られなかった状況である。

このような感恩堂の状況は，宗教政策が規定づけてきた従来の教会堂のあり方から見ると「異例」であると言える。しかしこの「異例さ」は，経済政策や都市開発の文脈において政府自らが容認する形で可能となったものである。つまり感恩堂は，中国経済発展の中心地であり，グローバル経済の最先端としての上海という都市の位置づけを反映して生まれた教会堂なのである。

この感恩堂について考察するにあたり本稿では，いかに感恩堂が中国の宗教政策の中では特殊であるのかを宗教活動場所をめぐる宗教関連法規に基づき説明し，その後感恩堂設立の経緯，教会堂の特徴および活動状況について，主に2004年から2009年にかけて行った調査でのデータに基づいて概説する。

2　中国における宗教政策と宗教活動場所

『中華人民共和国憲法』第三十六条では，「中華人民共和国の公民は宗教を信仰する自由がある」とし，「国は正常な宗教活動を保護する」と定めている[(1)]。但し保護の対象となるのは「正常な」宗教活動に限られ，「正常」の条件は政府によって定義される。宗教を管轄する主な政府部門は国務院直属の国家宗教事務局であるが，地方行政府レベルにおいても宗教を管理する行政機関が設置され，各地域の宗教組織，宗教活動を指導している。2004年には宗教に関する初の総合的な法規として『宗教事務条例』が公布されている。

中国の宗教政策の下において宗教活動が合法であると認められるには，各行政地域の宗教局に宗教団体および宗教活動場所を登録する必要がある。この登録によって宗教側は当局からの管理を受けるが，同時に宗教活動場所内での宗教活動は法的に保障される。週に一度集団での礼拝を必須とするプロテスタントおよびカトリックにとって，これら宗教活動場所に関わる法規の影響はとりわけ大きい。さらに活動が公認されるためには，宗教局への登録に加えて，共産党組織である統一戦線部に属する愛国宗教組織（プロテスタントは「中国基督教三自愛国運動委員会（以下「三自委員会」）」，カトリックは「中国天主教愛国会」）に加わることが求められている[(2)]。

これら活動が公認されている教会に属するプロテスタント信者は公式の統計では約2305万人（2011年）いる[(3)]。しかし実際のプロテスタント信者数は6000万人から1億人前後いるとも言われる。この統計は政府からの公認を受けていない教会，中国国外では「家庭教会」，「地下教会」といった名前で知られる教会に通う信者を加えた場合の人数である。これらの教会は，共産党政権成立以前から中国に存在していた教会グループや，80年代以降海外からの伝道師によって始まったグループなど様々であるが，活動場所を登録せず，個人の家，大学やオフィスの一室などを利用して活動をしているという点において，正式な教会堂を持つ合法教会とは大きく異なる[(4)]。活動場所を登録せず，また愛国宗教組織に加わらない理由は様々であるが，主に信仰的な理由から政府からの管理・指導を好まない場合や，活動自体に中国では非合法とされる要素が含まれている場合などがある。これらの教会は中国人信者の間では主に「家庭集会（中国語で「家庭聚会」）」あるいは「家庭教会」と呼ばれている。一方合法とされる教会は，主に「三自教会（中国語で「三自教会」）」，あるいは「教会堂（中国語で「教堂」）」と呼ばれる。本稿では議論を明確にする便宜上，三自委員会に属する教会を中心に，活動が

合法とされている教会を「公認教会」，それ以外を「非公認教会」と呼ぶことにする。

本稿において対象とする上海市において宗教を管轄する市政府機関は，「上海市民族と宗教事務委員会」である[5]。公認教会は行政区に従って縦割りで組織されている。上海市のプロテスタント教会を統括する宗教組織は，市レベルでは上海市三自愛国運動委員会と上海市基督教協会[6] である。さらに市以下の各行政区にも両組織が置かれ，各行政区の人民政府からの指導の窓口となると同時に区内の宗教活動を管轄している。

上海市では宗教関連の法規として『上海市宗教事務条例』を1995年に定めている（2005年に一部改正）。これは国の宗教政策に基づきつつ，より細分化された内容となっており，全部で十章（全六十三条）からなる。ただし，法規として明文化されてはいない決まりもある。合法とされている活動場所にはいかなる特徴があるのかは，現地調査や聞き取り調査などを経ないとなかなか明らかにはならない。また，地域によって活動場所の特徴や活動の形態には違いが出てくる。ここでは筆者自身の上海での調査を通して明らかになったいくつかの特徴のうち，本稿に関連するものをいくつか提示しておく[7]。

上海市全域には，2014年現在において111箇所の教会堂と58箇所の公認集会所がある。教会堂のうち中心市区にあるのは17箇所，郊外区にあるのが94箇所であり，活動場所の大部分は地価の比較的安価な郊外区にある[8]。現在の上海市政府の方針では，中心市区における教会堂は一つの行政区に一か所のみという不文律がある[9]。このような活動場所数の限定と共に，空間としての閉鎖性も注目すべき特徴である。上海市内ではほとんどの教会堂は高い塀で囲まれ，礼拝など決まった時間以外はその入り口は閉ざされ，入る時は門衛に用むきを伝えて許可を得なければならない。また海外に対する閉鎖性もある。例えば上海在住の外

国人の教会活動参加には，明文化されてはいないがさまざまな規制がある。例えば，基本的に外国人は中国国内の教会の教会員にはなれない。これは中国国内の宗教に外国の影響が及ぶことを好まない中国政府の姿勢を反映している[10]。

しかし一方で上海では経済発展に伴って長期滞在する外国人数が急増しており，それら外国人の宗教生活の需要に応えなければならないという課題が90年代半ばごろから浮上してきた。上海市は国際経済への積極的参入を目指し，市場開放および外資系企業の積極的誘致に力を入れてきた。その結果上海統計年鑑によると2000年から2006年にかけて上海市に居住する外国人数が，60020人から119876人まで約1.9倍とほぼ2倍近くに増加しており，2012年においてはその数は174192人と更に増加している[11]。上海市政府は，経済面においては外国人が上海に来ることをおおいに歓迎している。一方で宗教政策においては，中国人の宗教活動を一定の範囲内におさめ，管理する体制を整えている中国国内において，その体制を維持したままで外国人の宗教活動空間の需要にいかに対処するかという難しい課題に直面している。

上海市政府は外国人が中国人の教会に参加することは禁止していないが，そこで彼らが伝道を行うことは堅く禁止している。また，外国人が無許可で国内での宗教活動を行うことも禁止している。キリスト教に対しては，外国人のみが参加できる礼拝の場所と時間を設定するという方策を採っており，外国人プロテスタント信者のために市政府公認で開放されているのが国際礼拝堂である。ここでShanghai Community Fellowship（略称SCF）という名称で，1996年から外国人パスポート保持者のみ参加可という入場制限をつけて政府公認の外国人礼拝が行われている[12]。

海外との自由な交流を制限する宗教政策の下，現在のところ基本的に上海中心市区内の公認されている教会において，国際礼拝堂以外に外国

人の礼拝参加に対応する教会堂はなく，また外国人と中国人が共に教会員となっている教会はない。しかしながら本稿で取り上げる感恩堂は，公認教会として政府からの指導・管理を受ける教会であるにも関わらず，外国人と中国人とが共に一つの教会堂に通っているという特殊な状況にあるのである。感恩堂におけるこの特殊な状況の背景に，感恩堂が位置する浦東新区内の「張江ハイテクパーク」という開発特区の環境と，ハイテクパーク内に所在する，ある半導体メーカーの存在がある。次節以降は感恩堂設立の背景およびその特徴について概説してゆく。

3．感恩堂開設の背景

3－1．浦東新区および張江ハイテクパークについて

感恩堂は，上海市の東部にある浦東新区の張江ハイテクパーク内に位置する。浦東新区は1990年4月18日，中国共産党中央および国務院によって上海の黄浦江の東側に広がる浦東地区の開発政策が決定されたことによりできた行政区である。元来このあたりは人口も少ない農村地域であったが，黄浦江と長江に面した浦東新区は，長江流域及び上海全体の流通を結びつけうる立地条件にあることが着目され，上海を中心に中国全体の経済を牽引しうる場所として，国を挙げての重点的な開発の対象となった。同時に対外的にも積極的に開放され，アジアひいては国際経済の中心地としての上海が成り立つための戦略的開発地域に位置づけられた。

「浦東新区」と呼ばれるこの区域には，1992年以降経済技術開発区のすべての優遇政策と経済特区の優遇政策の一部が適応された。外資系企業による浦東新区への投資に対しては税収特典政策が実施され，積極的に外資や外国企業を誘致している。更にインフラ整備が進み，先進的な都市環境が整っており，現地の人々にも居住地として人気が高い。この

ような浦東新区には以下に挙げる4つの重点開発小区があり，浦東新区における開発を牽引する役割を担っている（図1）。

① 陸家嘴金融貿易区（金融，貿易，商業などの高度第三次産業機能）
② 外高橋保税区（総合自由貿易区としての機能）
③ 金橋輸出加工区（資本および技術密集型輸出加工機能）
④ 張江ハイテクパーク（高度技術産業の開発機能）

（図1）地図中四角で囲まれているのが4つの重点開発区。中央を流れるのが黄浦江。その西側が従来の上海の中心地である浦西地区，東側が浦東地区となる。（出所：新家増美・山口幸夫　2000年：149ページ掲載の地図を元に村上加筆。）

既存の市街地である黄浦江西側である浦西（黄浦江の西という意味）地区の都市空間が，租界というかつての歴史を再定位しつつ現代都市として再構築された都市空間である一方，かつて農村地域であった浦東（黄浦江の東という意味）地区は，90年代以降の政策に基づく都市計画によって，ほとんど白紙の状態に，新たに造りだされた都市空間である。このように浦西地区と浦東地区は都市空間として対照的であるが，宗教政策の実施のされ方においても浦西と浦東とは違いがある。すなわ

ち，経済発展優先の原理によって形成されている浦東において，宗教政策は浦西と比較してやや柔軟に実行されているのである。

感恩堂が位置する張江ハイテクパーク（中国語では「上海张江高新技术产业开发区」）は，1992年7月に浦東新区のほぼ中央に当たる場所に中国政府が認可して設立された特区である。計画面積は75.9平方キロメートルであり，技術開発区，ハイテク産業区，科学研究教育区，生活区などに分かれている。ハイテクパークへの交通手段として，2000年に浦西から東に伸びる地下鉄2号線が開通し，2010年の上海国際博覧会開催を機にその路線は更に東に伸び，現在は浦東国際空港を終点としている。ハイテクパークに行くにはこの地下鉄2号線の張江高科駅で降りる。この地域はもともと農村であり，開発区となってのちは会社および工場と，そこで働く従業員の住宅を中心に街が形成されていった。浦西の繁華街のような商業施設はまだ少ないが，周辺区域の開発は急速に進んでいる。

張江ハイテクパークでは半導体，ソフトウェア，バイオ製薬が三大産業分野として位置づけられている。この地区には，2006年末現在4862社が登録（2012年末は9164社）[13] している。そのうち外資系企業が1981社あり[14]，資生堂，パナソニック，キリンビール，味の素，三共，ソニー等日本の代表的な企業も進出している。これら企業の他に，北京大学，精華大学，復旦大学といった一流大学が理系大学院や研究機関をパーク内に置いている。特徴的であるのはパーク内の就業者の学歴の高さである。2012年末において就業者数27万人のうち，60パーセント以上が大学卒であり，さらに10人に1人が修士号を持っている[15]。居住者はパーク内の企業や教育・研究機関での就業者およびその家族が多く，さらに外国人居住者も多い。パーク内の一部の道路には「ダーウィン」や「エディソン」など科学者の名前が付けられ，ハイテクパークとしての特色をもった都市空間が形成されている。

この特色ある地区に2005年，「感恩堂」という新しい教会堂が誕生した。この教会堂の大きな特徴は，公認教会でありながらも海外との関わりが深い中芯国際集成電路製造有限公司という半導体メーカーと密接な関係があり，かつ中国人と外国人が共に同じ敷地内にある教会堂に通うことができるという点である。これらは，これまでの宗教政策の枠内ではほとんど見られなかった状況なのである。

３－２．中芯国際集成電路製造有限公司（SMIC）

感恩堂は三自愛国運動委員会に属する公認教会の教会堂であり，2005年末から活動を開始した。この教会堂が最も特異である点は，教会堂建設の資金の一部が中芯国際集成電路製造有限公司（略称は中芯国際集団。英語名Semiconductor Manufacturing International Cooperation，以下「SMIC」）から出ており，一企業であるSMICと密接な関わりがあるという点である[16]。

（写真１）張江ハイテクパーク内にあるSMIC本社ビル〔2009年村上撮影〕

SMIC（写真1）は中国最大の半導体メーカーであり，中国の企業ではあるが，多国籍な要素を多く有している。SMIC創業者である張汝京（ジャンルージン）氏は1948年に南京で生まれたが台湾で育ち台湾国籍とアメリカ

国籍を持っていた人物である[17]。アメリカおよび台湾でエンジニアとして半導体製造に携わった後，長年中国での起業を望んできた張氏は2000年に上海の張江ハイテクパークにSMIC本社を設立し大型工場を開設した。その後中国各地に工場を広げ，現在は北京，天津，深圳に工場を開いている[18]。従業員の構成は中国人，台湾人，日本人，アメリカ人，韓国人など多国籍であり，中国の企業とは言え，純粋な中国大陸のバックグラウンドを持つ企業ではない。

中国の宗教政策においては，憲法第36条においても，また2004年以降施行されている宗教事務条例（第1章第4条）においても「外国勢力の支配を受けない」という一文がある。そのため長らく，海外からの資金提供は支配につながりうるとの観点から制限されてきた。特に過去に欧米帝国主義の支配を受けてきた歴史を持つとみなされてきたキリスト教においては，資金と引き換えに何らかの宗教面での要求をされることもありうるとして，海外の諸団体や個人からの寄付の受付に対しては消極的な姿勢を保ってきた[19]。

SMICは中国企業であるとは言え，台湾はじめ外国との関係が非常に深い企業である。それにも関わらず，その企業から教会堂設立の資金を受けるというのは，従来の宗教政策の枠組みの中では特殊である。しかも，教会堂自体がSMICの従業員のために作られていると言っても良い状況であり，それらを鑑みると感恩堂設立の経緯においては何らかの特例措置が取られたと見ることができるであろう。あるSMICの従業員は，感恩堂の設立が実現したのは，統一戦線部宗教局と2009年までCEOであった張氏との強力なコネクションによるものだと話した。このコネクションは，SMICが中国国内の学校設立などにおいて積極的に慈善活動を行っていることによって培われたという[20]。このようにSMICは，単に利益追求のみを目的とした企業ではなく，社会公益への貢献を重視している。SMICのこの体質は，熱心なプロテスタント信者

である張氏に由来するものであり，SMICは以下のような特徴を持っている。

第一に，創業者である張氏をはじめとした経営陣および従業員にはキリスト教徒が多い[21]。従業員の福利厚生が非常に手厚い一方で，創業者である張氏自身は質素な生活をしており，従業員からの信望が厚い。第二に，社員構成は多国籍であり，さらに日本，シンガポール，台湾，アメリカ，イタリアにも工場や支社を開設している。第三に，会社内のキリスト教徒および会社近隣の中国人キリスト教徒のために，SMICの社宅内では聖書研究会，祈祷会などが頻繁に行われている。感恩堂の設立はその一環でもある。

３－３．SMICにおける教会活動―感恩堂ができるまで

SMICは2000年2月に上海で創業したが，感恩堂が設立される以前からSMICでは，キリスト教を信じる従業員が礼拝を行うための場所を確保しており，毎週日曜日，張江ハイテクパーク内の「張江集成電路産業区」にある集会所において礼拝を行っていた。この礼拝は当時三自委員会には属してはいなかったが，毎回三自委員会が派遣する公認教会の牧師が来ており，活動の公認には場所の登録と共に三自委員会への所属が必須であった当時の基準からみれば特別措置とも言える形態をとっていた[22]。

私が2004年1月4日にこの集会所での礼拝に参加した当時の状況は以下の通りである。礼拝は三自委員会が派遣する公認教会の牧師によって中国語で行われる。礼拝参加者はSMICの社員である台湾人や中国人，そして地元の中国人などがほとんどであり，欧米出身と思われる礼拝参加者は5人程度であった。その他の欧米出身の信者は同じ集会所にある別室で英語による祈祷会を行っていた。

このような三自委員会も関与する半公認の礼拝で，外国人や台湾人と

共に地元の中国人が共に礼拝に参加するのは，前出の国際礼拝堂での，中国人の参加を厳しく規制する外国人礼拝とは全く異なる状態であった。特に参加している地元の中国人の中には，外見から見て明らかに農民あるいは低所得者と思われる人々が少なからず見られた。それは張江ハイテクパークの，急速に形成されたために農村と都市とが混ざり合い，それまで上海市内の経済発展とは少し距離があった郊外区の住民とハイテク産業従事者や外国人とが混住しているという地域の特性を反映していたと言える。この集会所での礼拝参加者は，2005年以降は感恩堂が新設されるに伴い感恩堂での礼拝へと移ることになる。

4．感恩堂

4－1．感恩堂の位置と教会堂建築

2005年に完成した感恩堂は，丹桂路と申江路という大通りの交差する場所に位置し，総面積6000平方メートルの敷地に建つ。教会堂の設計は南京出身の中国人キリスト教徒によるものである。教会の設計を担当した設計会社である東端設計のホームページには，教会堂について以下のような記述があった。「外形構図の基本的な要素は大小様々の正三角形である。教会堂のデザインが構想するのは，羊飼いたちが水辺にテントを張り駐屯しているイメージである。このイメージは『聖書』の『黙示録』第21章，第3節の「見よ！神の幕屋が人の間にある。」から来ている。このような象徴主義のイメージは，信徒に対して強力な感化力を持ち，人々を結びつける効果を生み出しやすく，教会堂の設計においてしばしば必要とされているものである。」(23)

この建築様式に関してとりわけ注目すべきであるのが，教会の敷地内にほぼ同形の大小二棟の教会堂が建てられている点である（写真2）。この二棟の建物によって中国人と外国人とを分けて収容することによっ

て，同じ教会に中国人信者と外国人信者両方（その主なメンバーがSMIC従業員とその家族）が所属するという，上海の他の公認教会では認められていない例外的状況が解決されているのである。ここに三自委員会に属する公認教会であると同時に，SMICというインターナショナルな企業と密接に関わる教会堂としての性格の両立，すなわち政策が定める宗教活動についての規定と対外開放の下での宗教活動の変化の両立を見ることができる。

（写真２）感恩堂〔2007年村上撮影〕

2007年9月に私は，SMICの従業員で感恩堂に通う男性信者E（中国人）に，感恩堂についてインタビューを行った[24]。E氏は上海に隣接する省の出身で，かつて筑波大学に留学し，筑波市内の教会で洗礼を受けている。その教会を通じて張汝京氏と知り合い[25]，帰国後SMICに就職した。以下は男性信者Eから得た感恩堂の情報である。

「感恩堂は小さい教会堂と大きな教会堂がある。大きい教会堂は主に中国人用であり，中国語で礼拝を行う。教会員は約700～800人である。この教会堂は三自委員会に属しており，牧師（男一人，女一人）がいる。小さい教会堂では英語が用いられる。外国人専用で，欧米人が多い。参加者は約100～200人である。小さい教会堂（中国語で「小堂」

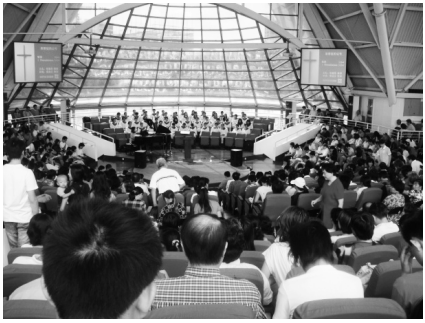
と呼ばれている。一方大きい教会堂は「主堂」と呼ばれる。）での活動は三自委員会には属しておらず，「サンデー・スクール」の名目で教会活動を行っている。正式な教会として活動することはできないので，牧師もいない。日曜礼拝はSMICインターナショナル・スクールなどの教師による説教が行われる。このように建物によって中国人と外国人が分けられ，その運営も異なる。しかし中国人が小さい教会堂での礼拝に参加することも，その逆もできる。」

このE氏へのインタビューからは，感恩堂が教会堂を二つ備えることによって外国人と中国人とをゆるやかに分けながら，宗教政策の原則を守りつつも張江ハイテクパークの地域的特色に対応する形で折衷的に新たな教会のシステムが実行されていることが見えてくる。

４－２．感恩堂での礼拝と教会堂の周辺環境

筆者は2009年9月に感恩堂の追跡調査として，感恩堂における礼拝と，教会堂周辺の環境の調査を行った。まず，主堂での中国人中心の礼拝では目算で900人ほどが参加していた。参加者は全体的に若い人が多く，70歳以上程度の老人もいるが割合としては少ない。礼拝参加者を案内する「案内人」と呼ばれる人たちは，みな大学生くらいの若い人たちで，そろいのオレンジのポロシャツを着ていた。

礼拝の流れは他の公認教会とほぼ同じであったが，筆者自身がフィールド調査で見てきた上海市内の他の公認教会ではあまり見られない特徴がいくつか見られた。まずは教会堂内部の建築様式であるが，演台が礼拝堂の中心近くの一番低い場所にあり，それを上に向かって取り囲むように会衆席がある。また牧師はほとんどの公認教会の牧師が通常着ているような礼服を着ていない。(写真3)。



（写真３）感恩堂中国人礼拝の様子〔2009年村上撮影〕

次に聖歌隊の様子が上海市内の他の公認教会と比べかなり西洋的かつ現代的である。礼拝が終わる前に，聖歌隊の服を着ていない私服姿の若者たちが数人前にでてきて，その中のマイクロフォンをつけた女性のリードで，パワーポイントで表示される歌を歌う。それらの歌は，上海市内の他の公認教会の礼拝で通常使用されている三自委員会が発行している讃美歌集にあるようなものではなく，福音派的な讃美歌である。概して礼拝の様子は，筆者自身が上海市内の他の公認教会で見てきた雰囲気と異なり，現代的な印象であった。

主堂での礼拝が三自委員会に属する聖職者たちによって行われている一方で，外国人信者が参加する小堂での礼拝には三自委員会は直接的には関与していない。そこでの礼拝には聖職者は参加しておらず，Thanksgiving English Fellowship, Adult & Youth Service という名称で，英語での礼拝を行っている。2009年9月の調査時では，参加者は目算で300人ほどであった。

４－３．教会堂の周囲の環境

感恩堂は，建物によってゆるやかに分けられているとはいえ，同じ敷地内で中国人と外国人が共に礼拝に参加できるこれまでにない教会堂で

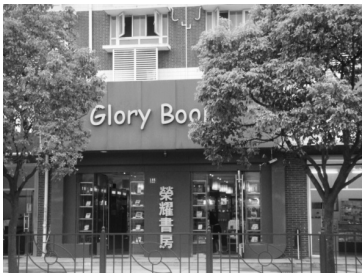
ある。そしてこの感恩堂を中心として周辺にはSMICの社宅（内部で家庭集会が頻繁に行われる），SMIC経営のインターナショナル・スクールおよびその学生寮，そしてキリスト教専門書店があり，独特の生活空間を形成している。

SMICの社宅（中芯生活区）は感恩堂から徒歩約5～10分程度の場所にある。それゆえに，感恩堂は近隣住民にも開かれているが，実際はSMIC付属の教会堂という様相を呈してもいる（写真4）。日曜日午前中は礼拝開始時間が近づくと，SMICの社宅から信者である従業員たちが列をなして徒歩で教会堂に向かう姿を見ることができる。前出のE氏の話では2007年当時，SMICの従業員社宅内には約500名の信者がおり，感恩堂のメンバーやSMIC内にあるたくさんのキリスト教グループと共に，自宅で聖書研究，祈祷会，交流会などを行っているとのことであった。

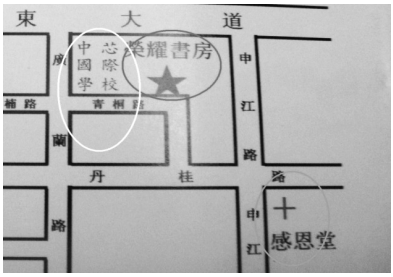
（写真4）大きな丸で囲まれているのがSMICの社宅を含む生活区域，
小さな丸で囲まれているのが感恩堂〔2009年村上撮影〕

また，SMICが経営するインターナショナル・スクールである中芯国際学校（写真5）は社宅の並びにある[26]。さらにその一画に上海の中心市区はじめ他の都市ではほとんど見られないキリスト教専門書店である栄耀書店がある（写真6）。栄耀書店はSMICの社宅近くにある中芯国

（写真５）SMICが経営する中芯国際学校〔2004年村上撮影〕



（写真６）栄耀書店
〔2009年村上撮影〕



（写真７）栄耀書店の位置。栄耀書店の隣にSMICのインターナショナル・スクールがある。感恩堂からは徒歩５分程度の位置にある。〔2009年村上撮影〕

際学校の学生宿舎の1階部分に2004年11月20にオープンした（写真7）。書店のオーナーはSMICとは直接的な関わりはないが，学生宿舎の1階部分の借用を申し込む際に，書店の理念を説明し賃貸人から大いに支持されたそうである[27]。現在ではこの地区に店を構える利を十分に受けると同時に，SMIC生活区の信者たちに様々な利便を提供している。この書店には，主に中国だけでなく台湾およびアメリカで出版された書籍が置かれ，書籍の内容は，キリスト教に関わる哲学，学術書や，家庭や家族など信者の生活に関わるものが主であった。ただし教会堂以外の場

所での販売が制限されている聖書は置かれていなかった。

この書店は書籍以外にキリスト教に関わるデザインの雑貨（記念品，贈答品，インテリア用品）も販売しており，感恩堂に通う信者やSMICで働く信者たちの宗教生活における需要に応えているが，中には宗教政策から鑑みると違法な宗教活動に関わる備品もあり，堂々と販売されていた。その備品とは「簡易スリッパ」である。この簡易スリッパにはFaithfulness，Michael，Patienceなど信仰に関わる言葉が英語で記され，そのそばには「家庭を開放しての集会の必需品（中国語で『家庭开放式聚会必备品』）」と書かれた紙が貼ってあった。前述の通りSMIC社宅内では，盛んに聖書研究会や交流会が行われているが，スリッパはそのための備品である。

このような形でのスリッパ販売は，他の国で言えばまったく普通のことであろう。しかし登録されていない場所である宗教活動は非合法であるという中国の宗教法規の文脈から考えると，この種の販売は「非合法の宗教活動」のための「必需品」を堂々と販売しているということになる。この状況から，感恩堂そのものだけでなく，感恩堂周辺もSMIC関連施設を中心に「キリスト教特区」的様相を呈していると見ることができる。これは，上海および中国国内のその他の地域と比べて非常に特殊な環境なのである。

5　まとめ

共産党政権による宗教政策は，宗教活動場所を可能な限り狭い範囲に限定し，それ以外の空間と遮断することを基本的な方針としている。しかし，それが物理的空間である限り宗教活動場所もそれ以外の空間，上海で言えば都市空間の中に存在しているのであり，完全にその影響を遮断することは不可能である。そのために，経済発展のための政策が積極

的に進められていく90年代以降の上海において，宗教政策の実施が，都市におけるその他の政策，特に経済政策や都市開発の影響を受けるという状況が現れてきている。

本稿では都市開発と関わりのある教会堂の事例として浦東新区の感恩堂を取り上げた。この教会堂は政府からの協力を得ながらも，様々な側面において従来は見られなかった新しい特徴をもっている。特に特定の企業と教会堂の結びつきは，キリスト教信者である企業家が多い温州市を除けば，対外開放著しい上海でも感恩堂以外には見られない。感恩堂の誕生の背景にはSMICという特殊な企業，そしてその創業者の個人的働きが大きく働いている。しかしそれよりも大きなうねりとして，浦東新区の社会環境全体の変化が感恩堂の誕生の背景として強く働いている。そこには外資系企業に大きく依存する上海市および浦東新区のあり方，そしてそれを背景とした共産党と企業の関係も関連している。それは中国政府および上海市政府によって始められ，率いられる変化であるが，その変化の中で生じる環境や人口構成の変化，新たなネットワークの出現などが，政府に様々な軌道修正と改革を迫ってゆく。そしてその流れの中で宗教活動における変化が生じているのである。

現在のところ上海では，感恩堂のような教会堂の誕生は宗教政策が徹底して実行されている浦西地区ではあり得ない状況である。今後この動きが前例となり，上海および中国の他の地域においても同じような教会堂が生まれることを政府が認めるのかは不明である。しかし上海市にとって感恩堂は，新たな段階に向けての実験でもあり，今後の中国における教会の開放のモデル・前例となることだろう。そこには国際経済の中心地を目指す上海のプロテスタント教会が向かう方向性，そして政府が探る方向性のひとつが暗示されていると言えよう。

注

（1）1954年に制定された最初の憲法においても，また現在に至るまで数回修正された憲法においても，「宗教信仰の自由」は常に明記されている。

（2）ただし2004年の『宗教事務条例』の公布に伴って2005年に『宗教活動場所設立の審査・承認および登記弁法』が公布されて以降，愛国宗教組織への参加は必ずしも必須ではなくなっている。それにより，信仰上あるいは組織上などの理由により，三自委員会への参加は望まないが，教会活動の法的保障を望む，これまで非公認の形で活動を行ってきたグループが，登録によって公認の活動場所を獲得し始めている。この動きは，今のところまだ過渡期であるが，チャン（Kim-kwong Chan）によると登録を望む非公認の教会は増えつつあるとのことである（2014年4月2日，同志社大学一神教学際研究センターでの研究会におけるチャン氏による口頭発表より）。

（3）中国社会科学院世界宗教研究所による統計に基づく〔金澤・邱永輝主編『宗教藍皮書　中国宗教報告　2011』，社会科学文献出版社，2011年，128ページ〕。

（4）しかし合法とされる教会とそうでない教会との関係性は必ずしも対立的なものではなく，両者の間には非公式の交流がある。このケースについては，〔Vala, Carsten. “Pathways to the Pulpit: Leadership Training in ‘Patriotic’ and Unregistered Chinese Protestant Churches.” In *Making Religion, Making the State,* edited by Yoshiko Ashiwa and David L. Wank, Stanford University Press, 2009　pp.96-125. および，村上志保「上海におけるプロテスタントの宗教空間―宗教政策と日常的実践のはざまで」『現代中国における社会主義的近代化―宗教・消費・エスニシティ』小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編，勉誠出版，2010年pp.27-55〕参照。

また，非公認の教会であっても，地方政府の対応の違いによってその形態や活動は様々であり，たとえば「中国のエルサレム」と呼ばれる温州市などでは大規模な教会堂を備えた非公認教会もある。

（5）この委員会の前身は上海市民族事務委員会と上海市宗教局であり，2000年8月に両者の合併により当委員会が設立された。

（6）国レベルにおいても両組織が並立し，通常中国プロテスタント信者は，

両組織を合わせて「両会（二つの会という意味）」と呼ぶ。この言葉は，しばしば中国プロテスタント公認教会の「指導部」や「上層部」という含意を含んでいる。

（7）上海はじめ中国における宗教空間について詳しくは〔村上　2010年前掲書〕参照。

（8）中心市区では活動場所総数の増加は非常に少ないが，地価の安い郊外区では活動場所が急速に増加している。データは上海市民族と宗教事務委員会のHP（『上海民族和宗教网』：http://www.shmzw.gov.cn/gb/mzw/index.html，2014年9月1日閲覧）より。

（9）2003年4月における当時リタイアしていた女性牧師への聞き取りから。同様の情報は上海華東神学院卒業生で，当時上海市内の公認教会に所属していた聖職者への2006年10月における聞き取りにおいても確認した。しかし上海中心市区以外の郊外区ではその限りではない。

（10）中国国内での外国人の宗教活動に関しては，関連法規として2000年から施行されている『中華人民共和国内の外国人の宗教活動管理規定の実施細則』があり，当局の許可を得ていない海外の教会および信者と中国国内の教会との間の交流や，外国人による無許可の宗教活動を禁止している。上海市においても1994年と2000年に上海市政府が公布した条例「中華人民共和国国境内における外国人の宗教活動に関する管理規定（1994年1月公布）」および「国境内における外国人による宗教活動に関する管理規定の実施細則（2000年9月公布）」において，同様の規制が明記されている。

（11）『上海統計網』：（http://www.stats-sh.gov.cn/index.html，2014年9月1日閲覧）より。

（12）国際礼拝堂における教会堂を使用しての公認された礼拝と同時に，上海市内各所では市政府からの公認を受けていない場所での外国人による礼拝活動が行われている。上海における外国人プロテスタントの宗教活動について詳しくは〔村上志保「中国上海市における外国人プロテスタントの宗教活動」『立命館大学社会システム研究』第20号，立命館大学社会システム研究所，2010年　pp.121-141〕参照。

（13）張江ハイテクパークのHP（http://www.zjpark.com，2014年7月30日閲覧）より。

(14) 張江ハイテクパークのHP（http://www.zjpark.com，2007年10月28日閲覧）より。

(15) 張江ハイテクパークのHP（http://www.zjpark.com，2007年10月28日閲覧）より。

(16) 残りの設立資金は，感恩堂の信者からの寄付による。

(17) 張氏は，台湾当局から張氏の中国内陸への投資が非合法であり，撤退するように迫られたことへの不満から，2005年に台湾国籍を放棄している。

(18) 2004年には香港およびニューヨークで株式上場を行った。また，北米，欧州，日本，台湾にマーケティング・カスタマーサービス拠点を置いている。

(19) ただし2004年の宗教事務条例公布以降は，海外からの資金提供を受け入れることは法的にも明確に認められている。宗教事務条例の第5章第35条において，「宗教団体，宗教活動場所は，国家の関係規定に照らして，国内外の組織と個人の寄付金を受け，それを当該宗教団体，宗教活動場所の宗旨に合う活動に使用することができる。」と記述されている。

(20) 2004年1月，SMICに勤務する中国人従業員の話から。この従業員は創業者である張氏と個人的に親しい人物でもある。

(21) インターネット上では，上海本社の社員のうち約800名がキリスト教信者であるという情報が出ている。例えば電子網cena.cn内の企業ニュースなど（http://www.cena.cn/show-137-66577-1.html，2014年11月3日閲覧）。

(22) 2005年4月14日に『宗教活動場所設立の審査・承認および登記弁法』が国家宗教事務局において採択されて以降，県レベルの人民政府への申請・登記手続きと，省・自治区・直轄市における人民政府の宗教事務部門による承認を経れば，三自委員会に属さずとも公認の活動場所を持つことが可能になっている。張江集成電路産業区にある集会所でのSMICの礼拝活動は上記法規の公布以前からのものであり，法規上は他の公認の活動場所とは異なる扱いを受けていたと言える。

(23) 東端設計ホームページ（http://www.okdrc.com/，2007年7月25日閲覧）より。東端設計（正式名称：上海東端建築規画設計有限公司）は，建築の企画，設計等を行う会社であり上海はじめ浙江省，江蘇省を中心にビ

ジネスを展開している。先端技術を駆使し，政府機関，研究教育機関，ホテル，劇場など現代的な大規模・高層建築などを多数手がけている。ホームページは2014年9月現在閲覧不可。

(24) 2007年9月当時，感恩堂は建築物の構造的問題によるガラス部分の破損により一時的に礼拝活動を停止しており，信者たちは代わりに金橋輸出加工区にある公認教会である鴻恩堂での礼拝に参加していた。

(25) 張氏は以前テキサス州の会社で働いていたとき，2年ほど日本に派遣されており，茨城県土浦市に居住していた。その際つくば市にある筑波国際キリスト教会に通っていた。

(26) 2001年創設。ホームページ（http://www.smic-school.cn/，2014年8月25日閲覧）によるとアメリカン・スタイルの教育を実施しており26カ国から来た2000名以上の生徒が在籍する。2005年に北京校，2008年に武漢校が創立されている。プロテスタント信者であるSMICの従業員の説明では，感恩堂ができるまでは，上海校内に備えられたプールで洗礼式が行われていたそうである。

(27) 栄耀書店のホームページ内の『十年の夢　栄耀書店』という記事（2006年07月23日）
（http://home.donews.com/donews/article/9/99606.html，2009年9月17日閲覧）より。

参考文献

新家増美・山口幸夫「第四章　都市の空間構造」田嶋淳子　編『上海―甦る世界都市』時事通信社，2000年

高橋孝助・古厩忠夫　編『上海史―巨大都市の形成と人々の営み』東方書店，1995年

田嶋淳子　編『上海―甦る世界都市』時事通信社，2000年

土屋英雄『現代中国の信教の自由―研究と資料』尚学社，2009年